

特集 仏教と聖徳太子 ~千四百年御聖忌を迎えて~



聖徳太子童形像・六臣像 桃山時代 十六世紀 四天王寺蔵

第6回花まつりデザイン募集

応募締切
2022年
9月30日(金)
まで
※当日消印有効

募集要項



第1回ポスター大賞作品 第2回ポスター大賞作品 第3回ポスター大賞作品 第4回ポスター大賞作品 第5回ポスター大賞作品

- 応募資格** プロ・アマチュア問わず、すべての方に応募いただけます。
(ただし、作品採用の場合、修正や転用に応じられること)
- 応募条件** 未発表のオリジナル作品で、仏教行事である「花まつり」を題材として自由に作品を描いてください。なお、作品に文字は入れないでください。
(例:お釈迦さまに甘茶をかける場面、ご誕生をお祝いする場面、寺院の行事やイベントの場面など)
- 作品規定** 素材・画材・技法は自由(デジタル作品も可)、立体物は不可
応募する作品は、下記のサイズを参考に制作してください。(複数応募可)

●募集作品サイズ●

用 紙:A3サイズ以上(297mm×420mm以上)
デジタル:300dpi以上(15MB以上、5000×7000ピクセル以上)

- 審査方法** 10月に審査会を開催し、大賞作品には主催者より連絡します。
審査についての電話やメールでの問い合わせはご遠慮ください。
- 応募方法** 本会webサイトより応募用紙をダウンロードし必要事項を明記の上、1作品につき1部同封してください。作品は折り曲げずに(筒状は可)郵送してください。
(デジタル作品もカラー出力後、郵送にて受付となります。)

作品送付先・お問い合わせ

公益財団法人 全日本仏教会 広報文化部
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館2階
TEL:03-3437-9275 FAX:03-3437-3260





特集
仏教と聖徳太子
 ~千四百年御聖忌を迎えて~

2022(令和4)年、聖徳太子(574~622)の没後千四百年の節目を迎えます。十七条憲法ではその第二条を「篤く三宝を敬へ」としたり、『三経義疏』を著すなど、太子は日本における仏教の定着に極めて大きな役割を果たした人物として長く尊崇されてきました。

本会には59のさまざまな宗派が所属します。新型コロナウイルス感染症やウクライナでの戦争など混迷を極めるこの時代だからこそ、それぞれ教えは違えども、仏教を日本にもたらした原点たる聖徳太子を今一度振り返るべく、特集として取り上げました。

まず、聖徳太子によって創建された四天王寺の副管長である瀧藤尊淳師にお話をうかがいます。四天王寺が、太子の教えや想いをどのように受け継ぎ、現代に活かそうとしているのか。また、大阪の庶民にとって太子と四天王寺はどのような存在だったのか。そして、後の世に各宗派を開いていった祖師たちと四天王寺を通した太子との関わりを語っていただきました。

次は、九度山・真田ミュージアム名誉館長の北川央先生による「『日本仏教の祖』聖徳太子とその信仰」と題した寄稿です。大阪の庶民文化を専門とする先生の立場から、聖徳太子が後世、人々にとって「日本仏教の祖」として捉えられるようになった様相が明らかにされます。

最後に、令和3年10月から令和4年4月にかけて四天王寺の聖霊殿で聖徳太子千四百年御聖忌慶讃法要を執り行った本会所属の諸宗派から、それぞれの宗派から見た聖徳太子についてご寄稿いただきました。

思えば太子が生きた6世紀後半から7世紀前半も疫病や国際的な緊張が続いた時代でした。今を生きる私たち仏教徒が、改めて「和」の精神を思い出し、行動へとつながる一助となれば幸いです。

全仏 653 号

C O N T E N T S

特集 仏教と聖徳太子 ~千四百年御聖忌を迎えて~

インタビュー
聖徳太子と四天王寺 4
 瀧藤尊淳/和宗総本山四天王寺副管長

寄稿
「日本仏教の祖」聖徳太子とその信仰 8
 北川 央/九度山・真田ミュージアム名誉館長

各宗派から見た聖徳太子 12

『全仏』誌論説委員のページ 18

西出勇志

法話 ぶっぼうそう
自分で使ういのちのかたち 22

関本和弘(融通念佛宗)H1法話グランプリ 2021 優勝

宗教法人運営のための法律入門
宗教法人が行う社会貢献活動(2) 23

本会からの報告 24

- ・ウクライナ情勢に関する理事長談話と支援募金
- ・各審議会における答申書提出
- ・第34期第4回広報委員会
- ・「救援基金」寄附者一覧
- ・「賛助会員」新規入会者一覧

四天王寺の極楽門の脇には親鸞聖人の御像が立っております。また門を挟んだ反対側には、今度は弘法大師さまの御像がございます。さらにその南には法然上人の御像、中心伽藍を越えて聖霊院の方に向かいますと、伝教大師さまの御像を納めた一乗院がございます。このように境内を見ていただだけでも、各宗派の祖師が聖徳太子を慕い、当山のご縁を結んでいただいたいでいることがご理解いただけるのではないかと思います。日本でも珍しい当山ならではの風景ではないでしょうか。



一乗院伝教大師像 法然上人像 弘法大師修行像 親鸞聖人像

信仰の百貨店

鳥居の中央に夕陽が沈む光景を見ることが出来ます。古来、この鳥居のある西門では夕陽の先にある極楽浄土を想う「日想観」を修しており、平安時代以降、浄土信仰の聖地として大変隆盛しました。この西門をめぐるには、当山の別当も務められた真言律宗の忍性上人が木造の鳥居を現在の石造に改められておりますし、また法然上人がこの地で日想観を修された際の草庵が、現在の一心寺さまの起源ともなっており、様々な形で信仰が繋がっていることがわかります。

また四天王寺は古くより天台宗と深い関わりを持ってきましたので、当山歴代の別当を天台の高僧が務められました。戦前までは天台宗のお寺でありましたが、一方で毎月21日の弘法大師会の縁日には境内に露店がでて多くの人でにぎわっております。

このように聖徳太子への信仰や浄土信仰、あるいは金堂での舍利信仰を基軸として、さまざまな宗派やお祖師さまへの信仰が多様に重なり合っており、「信仰の百貨店」ともいえるべき四天王寺独自の信仰形態が育まれてきたのです。こうした多彩な信仰は、四天王寺が「大阪の仏壇」と呼ばれ、親しまれる素地となっているのです。

昭和9年(1934)の室戸台風で五重塔が倒壊した際には、たくさんの庶民の方が力を合わせ

て再建に尽力されたことから、昭和15年(1940)に再建された新塔は「百万合力塔」と称され、その多くの善意を記念して、境内に記念碑が建立されています。これが象徴しているように、特定の一人の力ではなく、聖徳太子や四天王寺に帰依くださるたくさんの方々のご支援やお力添えによって、当山が1400年もの長い間この場所に続いてきたという歴史がございます。こうした人々と当山との密接な関係が、私どもにとってかけがえのない宝であると感じております。

太子の先進性

太子は、外交の玄関口にあたる難波の地に四天王寺を建立されました。これは、中国・隋からの使者が船で難波に入ってきた際に、上町台地の高台に五重塔・金堂・講堂が立ち並び光景をまざまざ印象付けることで、日本という国が高度な技術と文化を備えた国家であることを示されたのだと思います。当時の民衆はまだ竪穴式住居に住んでいたような時代に、さらびやかで壮大な伽藍が目の前に広がれば、仏教の教義などがわからなくとも、そのすごさというものを実感するには十分なインパクトがあったのではと想像します。

また太子は大陸の政策や思想・制度を日本に導

インタビュー

聖徳太子と四天王寺

和宗総本山四天王寺副管長 瀧藤尊淳



み教えを受け継ぐ

四天王寺は推古天皇元年(593)に聖徳太子によって創建されました。太子は、四天王寺を創建されるにあたり、仏教を基盤とした社会のあり方を模索されるなかで、仏の教えを弘める「敬田院」を中心に、病を治療する「療病院」、薬を授ける「施薬院」、社会的弱者を救済する「悲田院」の四箇院を設け、豪族や役人の目線ではなく、庶民の目線に立った政治を実践されました。この四箇院制度の制定は太子の大きな功績の一つであると考えておりますが、創建から今日に至る1400年の当山のあり方は、そのみ教えの実践につとめてきたことに尽きると思えます。

そういった太子のご精神を継承して、いつの時代も民衆と密接につながってきたことが、四天王寺がこの地で、寺域を損なうことなく今日まで続いてきた大きな要因となっております。当山は、慶長19年(1614)の大坂冬の陣や、近代では昭和20年(1945)の大坂大空襲で境内の南半分を全て焼失するなど、伽藍焼失の憂き目を何度も経験してまいりました。五重塔でいいますと、史料でわかっている限りで7度倒壊・焼失し、今が8代目であることから、俗に「七転び八起きの塔」という言い方もされておりますが、これも罹災と復興を繰り返してきたことを象徴しております。罹災のたびに時の為政者や民衆が四天王寺復興のために尽力してきたことは、日本人のなかにある、太子を崇敬し、そのみ教えを継承していこうという

心のあらわれではないかと思えます。

空襲によって焼失した境内は、戦後間もないころから復興を重ね、昭和54年(1979)の聖霊院奥伝落慶をもってひと段落しておりましたが、この聖徳太子千四百年御聖忌を迎えるにあたり、20年ほど前からさらなる境内の整備を進めてまいりました。最近では、太子のお父上の用明天皇をお祀りする用明殿や、伝教大師さまをお祀りする一乗院を復興しております。このように一歩ずつ旧来の四天王寺の姿を取り戻しながら、お参りいただける環境を整えていくことが、太子のみ教えを次代へ受け継いでいくことに繋がるのだと思っております。



四天王寺の中心伽藍と結縁柱

入し、冠位十二階や十七条憲法を制定されました。当時の状況を考えれば、「詔を承りては必ず謹め」という第三条の文言は第一条としてしかるべきところ。しかし、太子は第一条に「和を以て貴し

外的に日本をどのように見せるべきか、太子ならではの先進的な発想があつたのだと思います。

と為す」そして第二条に「篤く三寶を敬え」と続けられました。当時の豪族などからすれば異質な憲法にみえたかもしれないが、こうした太子の政治家としての卓越した才を感じるわけでは、十七条憲法を讀んでおりましたも、一つ一つの条文が現在でも十分通用するような内容であることに驚かされます。

衆生救済と仏教教育

ちょうど100年前の太子1300年御聖忌の時に学校法人四天王寺学園、その10年後には社会福祉法人四天王寺福祉事業団が設立されました。太子の本願である四箇院制度を、現代的に復興したわけでは、

私が学校教育に携わるなかで、四天王寺学園の生徒さんには、他人への喜捨、つまり自分より人に対して思いやる心を強く持つて欲しいと思っております。

これはいつも出す例え話なのですが、中高一貫である四天王寺学園で6年間ずっと皆勤の大変まじめな生徒がおりました。高等学校3年生のほんとうに最後の日、通学中に道端でおばあさんがしゃがんでおられたそうです。かなり前の話ですので、今のようにぱっと携帯電話をかけるという時代でもありませんから、その子はおばあさんを支えて病院に行きました。当然、学校は遅刻です。生徒は遅刻の理由をはっきりと言いませんでしたので、「あと一日だったのに遅刻してしまつて残念だったね」ということで6年間の皆勤賞を逃してしまつたわけ。ところが数日して「〇〇さんに助けていただいて命拾ひしました」と、そのおばあさんがお礼に訪ねてこられました。その時に初めて、学校

は生徒の遅刻の理由を知つたわけでは、

こういつた精神こそが菩薩道の実践という、太子が最も求めておられるところだろうと思うのです。今は進学校としての学業というのが表に出ておりますけれど、四天王寺学園の生徒として何より学んでいただきたいことは、こうした他者の救済、菩薩道実践の心であると考えております。

また四天王寺福祉事業団が運営する四天王寺病院には、富士さんという高齢の名物女性職員がおります。患者さんのことを大変よく知っている方で、「富士さんに会いに病院に来とんねん」「富士さんと会うと安心するわ」という患者さんたくさんおられます。富士さんからは「来年も仕事させてもらつていいでしょうか?」と言われますが、私どもも「元氣なうちは頼みますね」とお願いしています。

そういう職員がいることによって、周りの職員もそういう気持ちで一人ひとりのことを考えてお世話させていただければ、患者さんの心が穏やかになつて、痛みも和らいでいくのではないかと思ふのです。また、あるご高齢の患者さんが病院に來られた時、看護師から「おばあちゃん今日はすごく良いお顔をしていますね」と言われたことで、注射や薬よりも、その一言がおばあさんにとって癒やしであり、「薬」になつたということ

しょう。高度な医療のみならず、そうした心のこもつた看護こそがお寺が運営する病院の役割として大切なことと感じているところです。「人のため」という心で、身体が反応して動けるような教育や福祉を実践できる環境作りをしていきたいと思つております。

慶讃法要について

当山は聖徳太子千四百年御聖忌の慶讃法要に向けて、3年ほど前から準備を進めてまいりました。昨年の10月18日から、22か寺の各宗ご本山により慶讃法要を当山にて厳修いただきました。各ご寺院様の慶讃法要にて一緒にお勤めをさせていただいておりますと、お釈迦様に始まる仏教が、「和国の教主」と讃えられる聖徳太子によって日本に弘められ、長い歴史の中でそれぞれの宗派として多様に枝分かれし、教義を高めてこられたことを実感いたします。そして今、聖徳太子への尊崇という一つの想いで、こうして四天王寺にご参集いただいていることに、深い感動を覚える瞬間がございます。新型コロナウイルスやウクライナ戦争な



慶讃法要が行われる聖霊院太子殿

「日本仏教の祖」聖徳太子とその信仰

九度山・真田ミュージアム名誉館長 北川 央

1

聖徳太子は用明天皇の第二皇子で、「上宮太子」とも呼び慣らわされてきたが、本来の名を「厩戸皇子」といい、叔母にあたる推古天皇の皇太子となり、摂政を務めた。

その生年については、『聖徳太子伝暦』や『扶桑略記』は敏達天皇元年（572）、『本朝皇胤紹運録』は翌年、『上宮聖徳法王帝説』はさらにその翌年とする。

また、没年月日についても、正史である『日本書紀』が推古天皇29年（621）2月5日とするのに対し、法隆寺金堂の釈迦三尊像光背銘や中宮寺伝来の「天寿国繡帳」銘、『上宮聖徳法王帝説』『聖徳太子伝補闕記』といった法隆寺系の史料は翌年2月22日としている。

亡くなった場所についても、『日本書紀』が斑鳩宮とするのに対し、『天安寺伽藍縁起并流記資

財帳』や『太子伝古今目録抄』は飽波葦垣宮とする。斑鳩宮は現在の法隆寺東院伽藍がその故地で、飽波葦垣宮は奈良県斑鳩町の成福寺跡や隣接する安堵町の飽波神社が候補地とされている。

聖徳太子については、既に名前を挙げた『上宮聖徳法王帝説』や『聖徳太子伝補闕記』など、多くの伝記が編纂されたが、平安時代前期にまとめられた『聖徳太子伝暦』が決定版となった。こんにち多数伝来する『聖徳太子絵伝』などは、そのほとんどがこの『聖徳太子伝暦』の記述に基づく内容となっている。

こうした太子の伝記編纂の過程で見逃せないのは、鑑真とともに我が国に渡来した唐僧思託の著した『上宮皇太子菩薩伝』で、思託はこの書の中で、中国・南岳衡山の高僧慧思（南岳禪師）が「東方の仏法無き処に行き、人を化して物を度せん」といい、日本で聖徳太子に生まれ変わったと記した。そして、太子は、慧思だった頃に南

岳衡山に置いて

きた法華経を我が国に将来するため、小野妹子を遣隋使として派遣した、とも記したのである。

2

我が国における天台宗の祖最澄は、唐に渡り天台宗の教えを学んだが、慧思は、その天台宗を開いた天台大師智顛の師にあ

たることから、最澄は自らを「聖徳太子の玄孫」と称し、最澄の弟子円仁も『入唐求法巡礼行記』にこの聖徳太子＝慧思後身説を記した。

真言宗の祖空海もこの聖徳太子＝慧思後身説を支持し、後世、空海が磯長（大阪府太子町）の聖徳太子廟に百日間参籠したとの伝承が生まれ（「上宮太子廟参拝記文」）、空海は聖徳太子の生まれ変わりとする説まで現れた（『水鏡』『聖徳太子伝私記』）。法隆寺所蔵の「五尊像（太子五尊曼荼羅）」では大日如来・虚空蔵菩薩・如意輪観音の下、当麻寺中ノ坊所蔵の「山越阿弥陀図」では阿弥陀三尊の下に、それぞれ聖徳太子と空海が対置して描かれる。

日蓮宗（法華宗）の宗祖日蓮は、自らの拠って立つ法華経の将来者で、義疏もまとめた太子を篤く信奉した。

浄土宗の宗祖法然は弟子の証空（浄土宗西山派の祖）を太子廟に止住する願蓮のもとに派遣して学ばせ、西山派の流れを汲む時宗の宗祖一遍は四天王寺に参詣したのち、聖徳太子廟に参籠した。

浄土真宗の祖親鸞にいたっては、聖徳太子創建と伝える京都・六角堂（頂法寺）で参籠中に太子の夢告を受けて法然に弟子入りを果たした。初期真宗において製作された光明本尊では、源

信（恵心僧都）、源空（法然）、親鸞といった浄土高僧像の中にひとときわ大きく聖徳太子が描かれ、聖徳太子絵伝の多くは浄土真宗寺院に伝来する。融通念仏宗の宗祖良忍もまた、太子廟に参籠したと伝え、太子廟近くに良忍廟が営まれている。

ところで、聖徳太子にまつわる有名な伝説の一つに「片岡山の飢人伝説」がある。

太子が片岡山（奈良県王寺町）に遊行した際、道端で飢えに苦しむ人に出会う。太子は、食べ物と飲み水を与え、自らの衣服を脱いで体にかけてやった。



絵伝中の「片岡山の飢人伝説」

の飢人のことが気にかかり、家来を派遣したところ、既に飢人は亡くなってしまったため、哀れに思った太子は、飢人を丁寧に葬らせた。ところがしばらくして墓所をあらためると、遺体は消え、太子の与えた衣服だけが残っていた、というのである。これは中国の道教にいう「尸解仙」（死後、蟬

が殻から脱け出すように仙人になること）であるが、中世になると、この「飢人」は実は達磨大師であったという考えが成立し（聖岡『鹿島問答』、横川景三『補菴京華後集』）、これにより、聖徳太子は禅宗の臨済宗・曹洞宗からも信仰の対象となった。

各宗派の祖師の中でも、とりわけ篤く聖徳太子を信奉した親鸞は、たくさん和讃を作り、その中で太子を「和朝の教主聖徳皇」と表現した（『大日本国栗散王聖徳太子奉讃』）。「教主」とは釈迦のことであるから、親鸞は太子を「日本の釈迦」と呼んだことになる。

『今昔物語』は天竺部の第一話を釈迦如来から始めるのに対し、本朝部の第一話は「聖徳太子、此朝にして、始めて仏法を弘めたる語」で、末尾を「此の朝に仏法の伝はる事は、太子の御世より弘め給へる也」と締め括る。

『日本霊異記』も「聖徳皇太子異しき表を示す縁」を第一話とし、『三宝絵』も聖徳太子の話から始まり、「これより仏法さかりとなりぬ」と記す。

『塵添搥囊鈔』が「夫太子ハ本朝仏法ノ祖」と端的に記したように、聖徳太子は宗派の枠を超えた「日本仏教の祖」と位置付けられることになったのである。



絵伝中の「南岳取経」（聖徳太子絵伝 橘保春筆 文化10年（1813）四天王寺蔵）

先に空海を聖徳太子の生まれ変わりとする説を紹介したが、醍醐寺を創建した聖宝もまた太子の後身とされた(『東大寺要録』『東大寺具書』)。僧侶だけでなく、それぞれの時代に仏法興隆に尽した人々もやはり太子の生まれ変わりとされた。奈良の大仏を造り、全国に国分寺・国分尼寺を置いた奈良時代の聖武天皇(『日本霊異記』『東大寺要録』)。

「御堂閑白」と呼ばれた平安時代の藤原道長(『大鏡』)。

謡曲「鉢の木」で有名な鎌倉幕府の執権北条時頼(蘭溪道隆『神明鏡』)。

金閣寺を創建した室町幕府の三代將軍足利義満(義堂周信『空華日工集』)。

東は信濃の善光寺から西は出雲大社まで百ヶ所を越える寺社を復興した豊臣秀頼(禅林寺「当麻曼荼羅」墨書銘)。

足利義満は「片岡山の飢人」伝説の故地に達磨寺を再興し、豊臣秀頼は太子ゆかりの四天王寺・法隆寺、太子廟のある叡福寺などを復興した。

者を聖徳太子に仮託した多くの「未来記」が作成され、人々の行動にさまざまな影響を与えた。

このように「日本仏教の祖」と位置付けられた聖徳太子は、宗派の枠を超え、貴顕衆庶から多様な信仰の対象とされ、こんにちに至ったのである。

〈主要参考文献〉

- 大山誠一著「(聖徳太子)の誕生」(吉川弘文館)
- 東野治之著「聖徳太子―ほんとうの姿を求めて」(岩波書店)
- 林幹彌著「太子信仰―その発生と発展―」(評論社)
- 吉村武彦著「聖徳太子」(岩波書店)

『聖徳太子伝暦』は太子を救世観音の化身とし、法隆寺東院伽藍の夢殿の本尊救世観音像は「上宮王等身観世音菩薩木像」(『法隆寺東院資財帳』)と伝えられた。一方で、如意輪観音の化身とする考えもある(円運「如意輪講式」)。

また、聖徳太子廟には母の穴穂部間人皇后、妃の膳部菩薩、岐々美郎女と太子の三人が葬られていることから、太子廟は「三骨一廟」と称され、阿弥陀三尊に擬せられた。皇后は阿弥陀如来、妃は勢至菩薩、太子は観音菩薩とされ、太子は衆生を阿弥陀のおわします極楽浄土へと引



絵伝中の「御遷化」



大工など建築関係の人々の尊崇を集める四天王寺の番匠堂と曲尺太子

導する存在として信仰された。ほかにも、太子は四天王寺・法隆寺など多くの寺院・伽藍を建立したことから、大工らの信仰が篤く(太子講)、また太子の名が「厩戸皇子」で、厩の前で生まれたと伝えられることから、馬にかかわる人々からも信仰された。蘇我対物部の崇仏戦争に勝利したことから戦勝祈願の信仰、伎楽を奨励したことから芸能守護の信仰、また病氣平癒の信仰も集めた。

『日本書紀』に「未然を知らしめず」と記されたことから、未来の予言者としても信仰され、筆

北川 央

(きたがわ ひろし)

九度山・真田ミュージアム名誉館長

1961年大阪府生まれ。神戸大学大学院文学研究科修了。1987年に大阪城天守閣学芸員となり、主任学芸員・研究主幹などを経て、2014年から館長を務め、本年3月末で退任。現在は九度山・真田ミュージアム名誉館長。この間、東京国立文化財研究所・国際日本文化研究センター・国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館・国立劇場・神戸大学・関西大学など、多くの大学・博物館・研究機関で委員・研究員・講師を歴任。織豊期政治史ならびに近世庶民信仰史、大阪地域史専攻。『大坂城 秀吉から現代まで 50の秘話』(新潮社)、『大坂城と大坂の陣―その史実・伝承』『大坂城と大坂・摂河泉地域の歴史』(いずれも新風書房)、『なにわの事もゆめの又ゆめ―大坂城・豊臣秀吉・大坂の陣・真田幸村―』(関西大学出版部)、『神と旅する太夫さん』『近世金毘羅信仰の展開』『近世の巡礼と大坂の庶民信仰』(いずれも岩田書院)など著書多数。



天台寺門宗

この度は聖徳太子千四百年御聖忌にお招き頂き慶讃の法要を厳修出来ましたことに厚く御礼申し上げます。四天王寺さまとは宗祖智証大師円珍が安居講師を務め、あるいは長吏円恵法親王が別当職を務めていたこともございましてご縁がございます。

太子の初期日本仏教における功績は他に比するもの無く後の日本における仏教の隆盛に大きく寄与致しました。その太子のご恩また四天王寺さまとのご縁を大切にしながら、宗祖智証大師の教えである「済世利人」に邁進致します。



聖観音宗

聖徳太子様は救世観世音菩薩様の化身としてご示現され、慈悲による救済として四箇院の制を实践されました。四天王寺と同じく推古天皇の御代に開創され、観音様をご本尊とする聖観音宗浅草寺が、聖徳太子様の千四百年御聖忌法要を厳修し、観音経を読誦させて頂きましたことは無上の法悦でありました。今後とも聖観音宗としましては、観音様・太子様の慈悲のみ心を世に広め、人々の幸せの為、努めて参りたいと存じます。



孝道教団

孝道教団創設の本懐の一側面は、聖徳太子が示された真俗一貫並びに在家菩薩の仏教の現代社会における発展です。太子は『法華経』、『勝鬘経』、『維摩経』をとくに重んじられ、出家在家を問わず、男女の別なく大乘の菩薩道を行すべきことを教えられました。そのご精神に基づき、孝道教団は人々の日常生活で仏道が修せられ、さらに、仏法興隆により平和な社会が築かれることを目指しています。



昭和54年聖徳太子奥殿落慶慶讃大法要後の記念写真

各宗派から見た聖徳太子

2021(令和3)年10月から2022(令和4)年4月にかけて、聖徳太子や四天王寺と縁の深い22の宗派や寺院が、四天王寺で「聖徳太子千四百年御聖忌慶讃大法会」を厳修しました。そのうち本会に所属する宗派・寺院から、それぞれから見た聖徳太子、あるいは慶讃大法会にかけた思いなどをテーマにいただいた寄稿です。

天台宗

天台宗の宗祖伝教大師は聖徳太子への尊崇篤く、比叡山においても太子を信仰の対象としています。今も天台座主は磯長の叡福寺にある聖徳太子の聖廟へ上任の際、奉告の参拝をされます。

また、太子は中国天台の開祖である天台大師智顛の師、南岳慧思禅師の生まれ変わりとしてされています。

四天王寺様での御聖忌法要では、延暦寺でも毎年奉修している「上宮太子講式」を以って営ませていただき、太子の徳を讃えるときにも、報恩の誠を捧げました。法要を通じ、太子の「和」の精神が各々の心に宿ることを願っています。



天台真盛宗

和宗総本山四天王寺聖徳太子千四百年御聖忌慶讃大法会

天台真盛宗総本山西教寺は、11月10日(水)和宗総本山四天王寺において、聖徳太子千四百年御聖忌慶讃大法会を管長猗下御親修のもと厳修させていただきました。総本山西教寺は、寺伝によれば飛鳥時代、聖徳太子が恩師である高句麗の僧慧慈・慧聡のために創立したと言われており、そのご縁もあり法要を行わせていただきました。太子は、現世においては彌陀の名號を唱え、来世における極樂浄土を願ったと言われております。

西教寺においては、11月2日より「念佛三昧の一年」運動の一環として、西教寺本堂において『四十八日別時念仏会』を行っており、その別時念仏会(一定期間・一定時間の間御念仏に打ち込む修行)を四天王寺様においても行い念佛の声・鉦の音が奥殿に響き渡りました。



真言宗犬鳴派

聖徳太子慶讃法要おめでとう御座います。

聖徳太子は、日本仏教平和を象徴する人物で御座います。四天王寺を建立される際には「四箇院の制」を元に病者や身寄りのない老人などのための悲田院を建てられました。現在の社会福祉施設にあたると思います。

昭和40年代後半頃、当時の四天王寺の出口管長猥下に「宗教の教理面と福祉の実践面は両輪であるべき」とご進言いただき、私共も社会福祉法人犬鳴山を創設いたしました。

また、宮内庁に保存されていた葛城二十八宿の絵巻物を発見され、そのご縁から四天王寺で落慶法要が厳修される際は、葛城犬鳴山修験道が柴燈護摩を修するなど交流も御座います。

様々なご縁に感謝し、聖徳太子慶讃法要を通じて今後もお太子様の精神が引き継がれていくことを願っております。

合掌



浄土宗

聖徳太子が篤く敬うよう述べた「三宝」。これは、「十七条の憲法」にも書かれているように仏・法・僧という仏教で最も大切にしているもの。仏教では古くから時代や国を問わず、まずこの三宝に帰依することが仏教徒になる第一歩とされ、非常に重要視されてきました。

浄土宗では、日々となえる「日常勤行式」のなかに「三宝礼」というお経があります。これは、先ほども述べた仏・法・僧に帰依し、礼拝するもので、それを唱えることで、この三宝に従った生活を意識し直すことができます。

明治から昭和期の浄土宗僧侶で大本山増上寺の第82世・椎尾弁匡台下は三宝に対する帰依の精神・生き方を「明るく・正しく・仲よく」と表現されました。

日々の生活で、私たちは三宝に説かれることと真逆のことをしてしまいがちですが、感謝の気持ちを忘れずに毎日を笑顔で「明るく」過ごし、わが身を振り返りながら人生を「正しく」歩み、思いやりと敬いの心をもって「仲よく」生きることを誓って、過ごすことを浄土宗の信条としています。

浄土真宗本願寺派

宗祖親鸞聖人は聖徳太子を、日本における仏教の興隆者として「和国の教主」と仰がれ、太子を讃える和讃を二百首以上製作し、生涯を通して敬慕されました。本願寺では、毎年4月に恒例法要として聖徳太子会を、また、5年毎に磯長廟にて法要をお勤めしております。これらの法要を通して、太子がお弘めくださった仏法が多くの一人々に伝わり、それによって自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に繋がるよう努めております



念法真教

聖徳太子様の百年に一度の御聖忌に一座の法要の機会を賜ったこと、恐悦至極に存じます。

念法真教の開祖親先生は「宗教、思想、国境、民族を超えてみんな友達になろう」とお説きになったので、当方の本山では伝教大師様や弘法大師様、法然上人様、親鸞聖人様、日蓮聖人様、中国の孔子様、イエス・キリスト様などと共に太子様もお祀りしております。ですから、太子様には日頃のご守護に対して報謝の誠を捧げました。

合掌



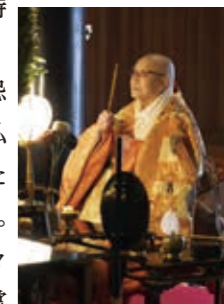
高野山真言宗

真言宗宗祖弘法大師は、出家の際に著された『鬘髻指帰』に、儒教・道教・仏教を対比し仏教の優位性を切々とお説きになられておられます。また、四天王寺の西門で日想観を行じられ、太子御廟所に参籠なされた折には、阿弥陀三尊を感得せられ、その御廟所をお護りする結界石を築かれようとされたとあります。

このことから、弘法大師は篤く仏法に帰依なされ、聖徳太子様への強い景仰の想いを持たれておられた事を伺い知ることができます。

この度、高野山真言宗総本山金剛峯寺では令和4年2月5日「聖徳太子千四百年御遠忌慶賛大法会」に際し、四天王寺聖霊院太子殿にて太子尊霊覚行円満・報恩謝徳、併せて仏法興隆・国家安穩・世界平和を祈念し法会を厳修させていただき、また法会に合わせて新たに改修がなされた同境内の弘法大師堂にて御法楽を捧げさせていただくことができました。このような百年に一度の有難い法縁を賜りました事に深く感謝致し、寺門並びに仏法の益々の紹隆を重ねて祈念申し上げます。

合掌



真言宗醍醐派

聖徳太子と醍醐寺

醍醐寺に伝わる古文書や聖教は、『醍醐寺文書聖教』として国宝に指定されている。この中には、聖徳太子を「観音後身」として描く『三国祖師影』（鎌倉時代・13世紀）や中宮寺蔵の聖徳太子の往生した世界を表すとされる『天寿国緯帳』を称賛する『太子曼荼羅講式』（南北朝時代・14世紀）、それに太子の生涯の事績を記した『聖徳太子伝記』（室町時代・長祿4年=1460）など聖徳太子に関わる作品も多く含まれており、聖徳太子を尊崇していたことが分かる。

近代に入っても、聖徳太子を敬う思いは続いている。そのことは明治42年5月に創刊され、現在も醍醐寺の機関誌である『神変』誌の第1号に記された発行主体である「聖役協会」の綱領を読むと分かる。綱領の第一条は「本会ハ聖徳、神変、理源ノ三聖ノ遺訓化迹ヲ以テ世界的宗教の標準トス」とある。同協会は、醍醐寺三寶院が中心となっている修験道当山派の興隆が大きな目的の一つであり、多くの修験者も参加している。

その修験道当山派の主要行事に毎年6月の「大峯山花供入峰」がある。大峯山に参り、修行する行事だが、近年は近畿一円の修験者が大阪の谷町にある醍醐寺の末寺に集結し、そこから天王寺まで練行してから大峯山に向かっている。その練行の道筋には、聖徳太子の創建した和宗総本山四天王寺があることから、四天王寺に参拝し、柴燈護摩を修するのが恒例となっている。

聖徳太子に対し、醍醐寺は古くから尊崇し、今も変わらずその業績の尊さを讃えている。

法相宗

佛教と聖徳太子

聖徳太子は、中央集権国家体制の確立を図り、国家の繁栄と国民の幸せを願って篤く三宝を敬い、佛教を信仰し興隆に勤められた事は、奈良佛教隆盛の礎となりました。千四百年の御遠忌を迎え、南都諸寺も遣徳顕彰に勤めさせていただきます。



真宗大谷派

聖徳太子は、日本仏教において宗派を問わず尊ばれており、私たち浄土真宗の祖である親鸞聖人もまた、聖徳太子の御和讃を二百首以上つくられ、「和国の教主聖徳皇」とたたえられています。

特に最晩年の作と伝わる『皇太子聖徳奉讃』（十一首和讃）では、太子はすべての人々を本願の世界へと導く救世観音の化身であり、この私を父母のように護り育ててくださる慈悲の人であると詠われています。

現在、真宗大谷派の寺院では、日々のお勤めのなかで太子の和讃を詠み、本堂には16歳のすがたとされる「太子孝養像」を掲げています。2021年4月4日には、真宗本廟（東本願寺）において聖徳太子千四百回御忌法要を厳修しました。



聖徳宗

昨年、旧暦の聖徳太子ご命日に合わせて4月3日から「聖徳太子千四百年御聖諱法要」を厳修致しました。この法要は、聖徳太子がご注釈された『法華経』『勝鬘経』『維摩経』を講讃し、その遣徳を讃えることによって、太子の遺願でもある伽藍および国土の護持と、仏教の興隆による万民の救済を本願と致します。当山は聖徳宗として聖徳太子を開祖と仰ぎ、その御精神と教えを信条としております。



真宗高田派

御開山親鸞聖人は聖徳太子が仏法興隆に尽力され、わが国を仏教国として推し進められたお徳に対して『皇太子聖徳奉讃』という和讃を百首ほどお作りになられました。

聖徳太子を観音菩薩の化身とお仰ぎになり、「和国の教主」と讃嘆しておられ、御開山のこのお心を反映して、第2世真佛上人・第3世顕智上人は『皇太子聖徳奉讃』を書写しておられます。このことから高田派にとっていかに聖徳太子が大切な方であるかがよくわかります。



華嚴宗

東大寺史の亀鑑である『東大寺要録』には、「聖武天皇は聖徳太子の後身、救世観音の垂跡なり」と記され、かつて聖徳太子が奈良に遊行され、自身の没後この地に精舎を建立し仏法を興隆するのは我が後身であると予言されたこと、即ちそれが東大寺であり聖武天皇であるとする説話が収められています。

こうした信仰、説話が生まれたのも、欽明朝に公伝した仏教を、国政の理念に据えて実践された聖徳太子のご姿勢が、聖武天皇へ継承されたと人々に理解されたためでしょう。

聖徳太子が我が国に植えられた仏法の種は、聖武天皇の時代に「大仏造立（東大寺創建）」という形で花開きました。さらに現代に至るまで、その枝葉は大きく広がりいくつもの実を結びました。

聖徳太子と東大寺を結ぶ説話が象徴するように、幾世を越えてそのご精神を伝えられますよう、皆様と共に「仏法の種」を大事に守り育ててゆきたいものです。

融通念佛宗

令和3年12月4日、吉村暉英管長猥下を導師に式衆18名、宗祖良忍上人以来の伝承声明を主にした次第のもと慶讃法要を勤めさせていただきました。

平安末期、宗祖良忍上人は「聖徳太子の夢告」を受け、その夢告により平野の地に日本最初の念仏道場大念佛寺を開創することになります。

広く日本の「太子信仰」を介して四天王寺様そして聖徳太子には特別な親近感を寄せさせていただきます。



「遺影」と「子ども食堂」

共同通信社編集委員 西出 勇志

12分間の短編映画「三塔周景」(2021年、YouTubeで現在公開中)は、奈良県斑鳩町の四季を記録したドキュメンタリーである。タイトル通り、この町を象徴する法隆寺五重塔、法輪寺三重塔、法起寺三重塔の三つの仏塔をモチーフにした。夏から秋、冬を経て春を迎える斑鳩の様子をカメラは丹念に追い、蒼天の白雲、薫風に揺れる翠緑の木々、青々とした水田、白に染め抜かれた世界などを叙情豊かに捉え、映像詩のような作品に仕上げている。

聖徳太子ゆかりの人里

それに磨きを掛けているのが、風景の中を歩き交う人々である。斑鳩神社の神輿を担ぎ、躍動する法被姿の男たち、コンバインで作物を刈り取っ



「三塔周景」(2021年)より

ていく農業者、竜田川沿いの桜を愛でながらゆったりと散策する親子連れ。描かれるのは生者だけではない。眩しい陽光の中の墓地と、暮色の墓地が遠景に収められる。鮮やかなコントラスト。静謐な空気の中、いのはかなさと愛しさが胸に迫る。こうした地表の営みを見守るように、四季折々、時間によって趣を変えていく三塔が印象的に映し出される。1400年前の飛鳥時代から、豊かな自然の中に仏教信仰が息づき、斑鳩の人々は日常を積み重ねてきた。自然と人が混然一体となった姿を捉える「三塔周景」が描き出しているのは、人里が醸す美しさだろう。それは日本の原風景の一つかもしれない。

監督は1966年生まれの横田丈実さん。龍谷大を卒業後に制作した作品「蝸牛庵の夜」が92年、プロの監督への登竜門として知られる自主映画の

コンペ「ぴあフィルムフェスティバル」に入選した。その後は数々の劇映画やドキュメンタリーを世に出してきた。劇団いかるがの脚本・演出も長年担当し、昨年11月には聖徳太子1400年遠忌を記念した「夢殿物語 和を以って貴しとなす」も上演している。仏教に縁が深い作品がいくつもあがるが、それは地元が聖徳太子ゆかりの地であるという理由だけではない。横田さんは映画監督・演出家・脚本家であると同時に、融通念仏宗の僧侶なのである。住職を務める浄念寺は、法隆寺と、法輪寺、法起寺のほぼ中間に位置する場所に立つ。

死者との密接な関係

仏教信仰に包まれてきた地で住職を務める横田さんは、生者と死者をつなぐ絆に温かな目を注ぐ。そんな作品の一つが、2017年に公開したドキュメンタリー映画「遺影、夏空に近く」(53分)である。遺影をめぐる七つの家族の物語で、15年の一夏に撮影された。大きな特徴がある。登場人物のほとんどが浄念寺の檀家なのである。そのためだろう、それぞれの自宅で撮影された人々は実に自然体だ。柔らかな表情でカメラ前において、遺影と故人をめぐる話題を語っている。

亡き人の面影を偲ぶ写真の多くは、家々の鴨居



の上に並ぶ。にこやかなカラー写真もあれば、いかめしいモノクロの軍服姿もある。視線を鴨居に沿って横にスライドしていくと、家族の過去と現在が浮き彫りになる。映画では、戦争から帰って

きて自分たちを育ててくれた父親への「表彰状」のつもりで写真を額装したと語る男性がいる。また、出征時の壮行会と靖国神社の鳥居の写真とともに掲げられた若々しい男性は、登場人物である



「遺影、夏空に近く」(2017年)より

「育て」の領域

女性の義兄だ。戦没した義兄について語る女性は絞り出すように非戦への思いを口にしている。

一方、早世した息子の遺影に話し掛ける女性がいる。遺影との距離は非常に近く、先祖と並んで鴨居の上に高く掲げる気持ちにはならない。そんな哀切に満ちた思いが画面越しに伝わる。映画で数珠繰りに出てくる女性は夫を亡くし一人暮らしだが、まだ夫が近くにいるように感じると言う。遺影は鴨居ではなく、背丈の小さな筆筒の上にある。それぞれの語りと遺影の位置に、死者との濃密な関係がのぞく。

映画「遺影、夏空に近く」は、生死をめぐる物語を、遺影を通して可視化した。僧侶でなくても取り組めた主題かもしれないが、僧侶であるからこそ、縁のある人々の思いを含んだ奥行きのある佳品に仕上がったのだろう。寺での上映会の際は、スクリーンに向かって語り掛ける人もいたという。遺影になった人、遺影を語る人、そして映画を見る人が醸す一体感は、人里・斑鳩という地域共同体によって支えられている。



テンプル食堂よしざきの準備をする八幡真衣さん（右）

東日本大震災以降、僧侶の社会活動が活発化した。町おこしから福祉分野まで、さまざまな活動

僧侶がつなぐ縁

それが桁外れに大きな数字であることが分かる。

八幡さんは子育ての当事者である。つらいことも多いし、悩むこともある。だから似た立場にいる者として悩みを聞こうと思ったという。研修を受けたビハラー僧は、医療機関や福祉施設で患者に寄り添うが、現在の自分にとっては子ども食堂がそれに当たると考える。テンプル食堂よしざきは子ども食堂を名乗らず、誰でも参加OKにした。だから、子育て世代だけではなく、高齢者も訪れる。ひとり親家庭で厳しい暮らしの人もいれば、食事代以上のお金を置くためにやってくる人もいる。背景はさまざまだからこそ、貧困者のための食堂というカラーが薄まる。そんな中から本当に支援が必要な人にコンタクトし、手を差し伸べる。認定NPO法人「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」の調査によると、子ども食堂の数は昨年未で少なくとも6007。一昨年は4960だった。1年間に1000力以上の増加である。貧困層への支援充実は必要だが、つらい立場にいる人が多いからこそ需要が膨らむ。八幡さんは「子ども食堂がない社会が最終目標」と話した。

横田さんの「遺影、夏空に近く」は、檀家への月参りで話を聞くうちに映画化が構想されていた。登場人物の何人かは既に故人である。映像の中で語り、歩く姿は生の証しと儚さを映し出す。生者はいつの間にか死者となる。世は有為無常。注目すべきは、生者と死者、生者と生者を地域の中でつないできた僧侶という仕事である。今、それがどれだけ認識されているだろうか。その大きさがどれほど訴えかけられているだろうか。

八幡さんの「テンプル食堂よしざき」は、地域に大きく開く。貧困が根絶されて子ども食堂が必要でなくなる社会が到来したとしても、地域コミュニティの重要性は変わらない。子どもにとって、温かく見守る目は多数あった方がいい、と八幡さんは思う。子どもに限らず、地域の力が従来のように機能しなくなっている今、多くの人が顔を合わせる場は重要であり、さらに安心できる居場所があることも大切だ。その要こそ「縁」。テンプル食堂よしざきが根差すつながりである。

が全国で展開されている。中でもひとり親家庭の困窮に注目した「おてらおやつクラブ」の誕生が実に意義深い。「おそなえ」を「おさがり」としてもらって「おすそわけ」する。シンプルでありながら実を伴った仕組みの見事さが、超宗派活動として成立している事実には仏教界はもっと注目する必要がある。「生死」に加えて「育て」の領域に活動の可能性を開いた点も特筆すべきことだろう。

そんな「育て」を主軸にしつつ、地域の生を支えようと活動し始めた20代の女性僧侶がいる。石川県小松市にある浄土真宗本願寺派本光寺の衆徒、八幡真衣さんは、福井県あわら市での子ども食堂「テンプル食堂よしざき」代表を務める。2児の母でもある。寺の生まれではあるものの、10代の頃は仏教に関心がなく、自分が親になった際に父親の仕事に興味を持つようになり、得度から教師、布教使まで一気に駆け抜け、ビハラー僧の研修も受けた。

西出 勇志 (にしで・たけし)



1961年京都市生まれ。85年に共同通信社入社。長崎、京都支局などを経て本社文化部に勤務後、2009年に東京メトロポリタンテレビジョン(TOKYOMX)に出向、2年間報道部長を務める。11年から編集委員として「こころ」のページを担当。長崎支局長を経て18年春から再び現職。宗教とその周辺を約30年間、取材している。

宗教法人運営のための 法律入門

宗教法人の管理運営 17



宗教法人が行う社会貢献活動（2）

はじめに

宗教法人の行うボランティア活動について、その位置付けに変化がみられます。宗教法人が行う業務・事業は、その目的達成の為の業務とそれ以外の事業に分けられ（宗教法人法第1条）、後者は公益事業と公益事業以外の事業に分けられてきました（宗教法人法第6条）。

ところが、宗教法人が宗教施設を災害の避難所やボランティア活動等に提供したりすることが、その目的達成の為の宗教活動と位置付けることが可能であるという情報が文化庁宗務課から提供されました。先回はこの内容を紹介しましたが、今回はこの文化庁宗務課から提供された情報の周知と論点整理を行った公益財団法人日本宗教連盟のガイドラインを紹介いたします。

●情報の端緒と宗教法人の責任

日本宗教連盟のガイドラインは、令和3年2月2日付で公表されました。その頭書では次のように述べています。
「当連盟では近年、一部地域で宗教法人の固定資産課税の問題が散見されると聞き及び、宗務課に問い合わせを行っていた。具体的には、宗教法人が、近隣住民をはじめ一般の人々の救済・支援活動を目的として災害備蓄品や炊き出し用機材等を境内建物等で保管した場合、それは宗教活動と認められず、当該保管箇所に対して固定資産税が課税されたという事例を発端としている。」

この点は、文化庁宗務課の「情報」の頭書において「この度、日本宗教連盟からこのような活動（「公益活動」のこと）と宗教活動の関係について問い合わせがあった為…」と記載されていることに対応しています。そのうえでガイドラインは次のように述べています。
「この事務連絡によって、宗教法人が檀信徒や氏子崇敬者、信者信徒のみならず、広く不特定多数の市民を支援、救済する等、公益事業として社会に貢献する活動を行う場合、それが地域社会のニーズを満たし、必要不可欠との社会通念を踏まえており、かつ、宗教法人側でも、その活動が教義・教憲、実践綱領等に基づくものであると明確に説明、判断できる場合には、「公益事業」ではなく「宗教活動」であると整理することが可能との判断がなされた。この判断は、宗教活動の幅を広げ、公益的な活動に大きな意義を与えると同時に、宗教界に重い責任が課せられたともいえる。社会貢献を目的とした宗教活動を展開するにあたり、自律規範による実施が社会的責任となる。」

●ガイドラインの内容

ガイドラインは次の4点から成り立っています。即ち

- 1 社会に貢献する活動を宗教活動と整理するにあたっては、地域社会の宗教活動へのニーズをはじめとした「社会通念」と踏まえることが最も重要である。
- 2 社会に貢献する活動がどのような観点から行われるのか、宗教活動と密接不可分である理由が明確に説明できること。また、教義や教憲、実践綱領等に則って行われる「宗教活動」であるとの根拠が明確であることが望ましい。
- 3 宗教活動として社会に貢献する活動を行う場合は、その活動に関する宗教法人の携わり方や活動内容の透明性を確保し、社会に対する説明責任を果たす必要がある。
- 4 あくまでも、自主的な活動、宗教法人自らが携わる活動であること。他のNPO法人や公益法人の社会貢献活動を、自らの宗教活動とすることはできない。活動主体の変更など、宗教活動と整理するための取り組みが必要となることも考えられる。

今回は、上記4点を具体化したガイドラインの内容を御紹介しましょう。

尚、文化庁宗務課の「情報」や、日本宗教連盟のガイドラインは、日本宗教連盟のホームページに掲載しています。

作成・監修 弁護士 長谷川正浩

自分で使ういのちのかたち

寒かった季節が去り、コロナ禍といえど外を見れば梅から桜、またハナミズキへと季節に咲く花も移ろってゆきます。年度が変わり新しい生活にこころを踊らせる方々も多いのではないのでしょうか。

そんな一年の中でも過ごしやすい時候の中、灌仏会をお勤めくださるお寺もたくさんあるかと思えます。灌仏会はまだの名を花祭りともいい、お釈迦様の誕生を祝う儀式でもあります。

お釈迦様は旧暦の4月8日の夜半にネパールのルンビニの花園でお生まれになったと仏典に記されています。仏典にはお釈迦様はお生まれになるや七歩歩いて周りを見渡し、おもむろに右手で天を、左手で大地を指して「天上天下唯我独尊」と仰ったとされています。その意味は、天の上にも下にも私という尊い存在はないということ、ここで言う「私」というのは、この地上に存在する全ての命の事を指しています。

現代を生きる私たちは思いもかけない、そして想像以上の抑圧の中を生きて行かねばならないこともあります。他人の顔をうかがって、時には道徳に反する事さえもさせられてしまうようなこともあるかもしれません。自分の感情を押し殺して常に笑顔であることを強要されて、素直に怒ったり泣いたりできない環境で生きている方もいらっしゃるのが現状です。

そんな自分に気づいた時にはこのお釈迦様のお言葉を思い出して欲しいのです。あなたという尊い存在を大切にしてくださいと、あなたの命は軽々しく他人に使われる物ではないのですよとお釈迦様はそう教えてくださっています。

日々の忙しい中であって仏様、ご先祖様に手を合せず時間はおろそかにされがちです。ですが忙しい現代だからこそ、その時間はかけがえのない自分自身と向きあうことのできる大切な時間でもあるわけです。私という大切な命の使い方は日々の合掌の中にゆっくりとゆっくりと見いだすことができるのです。そしてあなたの合掌の姿は何も言わずともしっかりと次の世代に受け継がれ、見えない物を大切にしておかげさまのこころとともに自分を大切に生きることが出来る人へと導いているのです。

どうか自分を大切に生きてください。そして一日の終わりにはご自身に「ありがとう」と、感謝のお声をかけてあげてください。

天にも地にもひとりなる 尊き我に目覚めよと
教え給いし法(のり)の花 後の世までも香るなり
(梅花流詠讃歌「釈尊花祭御和讃」より)

プロフィール 関本 和弘 (せきもと わこう)

融通念佛宗大念寺(大阪府寝屋川市)副住職/布教師/保護司
令和3年10月30日H1法話グランプリにてグランプリに選ばれる。
自死に向き合う関西僧侶の会の立ち上げメンバーとして自死遺族支援活動に取り組む。



法話

ぶつぽうそう

16

「ぶつぽうそう（仏法僧）」では専門家や大人だけではなく、子どもでも分かりやすい言葉や内容を心がけて、日々の生活に役立ち活かしていける法話を紹介いたします。

ウクライナ情勢に関する
理事長談話と支援募金

2022年2月28日、緊迫するウクライナ情勢について理事長談話を発表しました。合わせて、3月8日に支援募金の体制を整えました。談話内容と支援募金の方法は以下の通りです。人道支援として支援金の協力を、周知のためのご協力をお願い申し上げます。

【理事長談話】

2022年2月24日、ロシア軍がウクライナに侵攻しました。国際社会の願いも叶わず、問題を解決する手段として武力を用いた暴力行使し、ヨーロッパにおいて戦争が始まりました。誠に残念でなりません。

わたくし人類は、過去の悲惨な経験を通して、「戦争は問題の解決にはならず、悲しみ、苦しみ、怒り、憎しみを生み、誰ひとりとして幸せにしない」ことを学んできたにもかかわらず、世界を巻き込む戦争が起きたことに、深い悲しみと憂慮の念に胸が締めつけられる思いです。

仏陀は「すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」(中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』「ダンマパダ」130)と述べられています。

全日本仏教会はこの戦争により、苦しみ、不安、悲しみがある人々に思いを寄せ、一日も早く戦争が終わり、ウクライナの人々が平和な日常生活を取り戻し、更なる暴力の連鎖が起きないこととして世界平和が実現されることを心より祈念いたします。

令和4年2月28日

公益財団法人全日本仏教会理事長

戸松義晴



災害救援基金 海外人道支援
ウクライナ支援募金

振込先：三井住友信託銀行 芝営業部
普通預金 0973031
公益財団法人 全日本仏教会
コウエキサイドンホウジン センホンブツキョウカイ

詳しくは全日本仏教会ホームページ
<http://www.jbf.ne.jp/>
お知らせ「ウクライナ支援募金」まで

公益財団法人
全日本仏教会
WFB (世界仏教徒連盟) 日本センター
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館2F
TEL: 03-3437-9275 FAX: 03-3437-3260
全仏財務部 e-mail: zaimu@jbf.ne.jp

※振込の際には本会へお知らせください。※本会の救援基金に対する寄付金は税制上の優遇措置の対象です。控除申請のための領収書の発行に必要な「銀行振り込み事前連絡用紙」についてはホームページでご確認ください。

各審議会における答申書提出

令和3年1月25日、社会・人権審議会および国際交流審議会における答申書を戸松義晴理事長に提出しました。内容はそれぞれ以下の通りです。

【第34期 社会・人権審議会答申】

諮問①

首相及び閣僚の
靖国神社公式参拝についての要請

答申

標記諮問について、本会が1986(昭和61)年以降、毎年提出し続けている要請を2020(令和2)年も提出するか否かについて検討した。その結果、本会は「政教分離」「信教の自由」の原則を遵守し、政府に訴えることの重要性に鑑み、首相及び閣僚の靖国神社公式参拝についての見解並びに要請を文書にて安倍晋三内閣総理大臣宛に提出することを議決した。

次に文書の作成に当たり、過去に提出した要請書を基に、本会はすべての戦没者の追悼は丁寧に行われるべきと考えており、仏教界としてもそれを実行してきていることを引き続き主張した。

また、首相ならびに閣僚が公式参拝することの問題点は、靖国神社が今もなお国家の中心的な戦没者追悼施設であるかのような誤解を招くことであ

り、その問題点の記述は変更しないことを確認した。

戦後75年という節目にあたり、あらためて現在の内閣に日本国憲法に示す「政教分離」「信教の自由」の原則に基づいて、国民誰もが安らかな心で戦没者の追悼ができるよう、賢明なご判断とより一層慎重な行動をお願いする文言を表記した。

これらの要素を考慮し、表題並びに文案を検討し作成した結果、別紙「首相及び閣僚の靖国神社公式参拝についての見解と要請」を採択した。なお、要請書の提出時期と方法については、理事長に一任とすることを確認した。

2021(令和3)年においても、第6回審議会にて、首相及び閣僚の靖国神社公式参拝に関する見解並びに要請を引き続き菅義偉内閣総理大臣宛に文書で提出することを議決した。

提出文書の内容作成について、昨年度提出した要請書が今期審議会委員により慎重に協議されたものであることから、同様の内容を基本とするとして、一部冒頭の文節を修正して提出することとなり、別紙「首相及び閣僚の靖国神社公式参拝についての見解と要請」を採択した。

なお、要請書の提出の時期と方法については、理事長に一任とすることを確認した。

諮問②

「死刑制度を問うとき、いのちの尊厳と人権の見地から仏教者はなにをすべきか」

答申

前期である第33期の理事長諮問「死刑廃止について宗教者はいのちの尊厳と人権の見地からどのように捉えるか」に対する答申の中に、仏陀のおしえや仏教の教義と死刑が相いれないことは明白であると示している。その上で、第34期の標記諮問に対して、前期に示された基本的指針をふまえ、仏教者に求められる行動にはどのようなものがあるか、取り組むべき具体的な課題と活動の可能性について審議した。

今期の審議会において、犯罪被害者遺族、加害者家族支援団体、冤罪被害者の方々から「提言をいただいた。死刑制度に関しては、冤罪があれば取返しがつかないことや、近年、死刑制度が存在するが故に「死刑になりたい」と凶悪犯罪の動機になっていく事例があることも学んだ。加えて、立法機関である国会ではどのような議論があるのかについて、「日本の死刑制度の今後を考える議員の会」からお話しを伺った。同時に、第33期に教誨師、犯罪被害者支援の立場、死刑廃止推進の立場、元刑務官の方々からお話しいただいた内容を振り返り、死刑を巡る様々な課題があること、また仏教者が取り組むことができ、可能性のあることを再確認した。それぞれの課題を整理し議論を重ね

た上で、仏教界は犯罪被害者支援にも積極的に取り組むべきだということ。今期の審議会では認識し、シンポジウム「被害者・被害者家族と共にあるなかで」の開催に至った。シンポジウムでは犯罪被害者遺族の立場から、「喪の時間を過ごしたい」「加害者からの誠実な謝罪」「被害者も加害者も生まない社会の実現」という三つの望みが挙げられた。

喪の時間に仏教者が携わることが多い中で、遺族に対して悪意なくかけた言葉が適切ではなかったということや、通夜や葬儀などの儀式において遺族の意向が全く尊重されていないなど、遺族を置き去りにした形式的な用いになっている事例があり、そこに不満があっても言い出せないというお声をいただいた。これは、グリーフケアができていないが故に、深い喪失を抱えた遺族を寺院や仏教者が再び苦しめてしまう二次被害の加害者にもなりかねないことを示している。この課題解決のためには、何が遺族を傷つけるのか、対話の際に気を付けて使わなければならない具体的な情報を仏教界で共有することが重要であるとされた。

また、犯罪被害者遺族にとって「忘れ去られる」ことはつらいこと。仏教者は心の深いレベルで寄り添うことが求められる存在であり、寺院を死者と生者が語り合えるような、いのちを

繋いでいく場所にできる可能性があるという期待もお聞かせいただいた。この期待に応える役目を寺院及び仏教者は担っているという自覚を持つことも肝要である。これらのことは、犯罪被害者遺族のみならず檀信門徒をはじめ、様々な形で別離の悲しみを抱えられている全ての方に對しても同じことが言えるため、日常の寺院活動の中でも意識すべきことではないだろうか。

これまで仏教界では、教誨師や篤志面接委員、保護司などの加害者側への取り組みは活発に行ってきた。上下関係のない一対一の人間同士の対話をとおして、加害者の矯正教化や社会復帰支援をするという活動に加え、被害者への誠実な謝罪や反省を促すことで被害者支援にも繋がるような活動の可能性も十分に考えられる。

被害者遺族から見ると、仏教者をはじめ宗教者はどちらかというと加害者側に寄り添っているというイメージもある中で、犯罪被害者週間について全日本仏教会加盟団体をはじめとした関係団体に周知し、活動に参加していくことも考えられる取り組みの一つであろう。今後さらに、被害者遺族の方々にさせていただけることはないか教えていただき、共に考え、寄り添い一緒に歩んでいく存在でありたいと発信し行動することが重要である。

第34期第4回広報委員会

日時と出席数
 日 時：令和3年12月8日（水）
 午後1時30分～

場 所：京都東急ホテル
 ハイブリット会議

出席委員：14名
 代理出席：1名
 出席事務局：5名
 オブザーバー：2名
 報道関係者：9名
 サポート：1名

進行

- 開式の辞
- 「三篇依文」唱和
- 事務総長挨拶
- 出席者紹介
- 会議
- オブザーバー（発表者）による提言
- オブザーバー2名による対談
- 意見交換
- 閉式の辞

概要

昨年1月に日本に上陸した新型コロナウイルス、本年10月末には感染者数171万人超、死亡者数1万8000人超を記録しました。言うまでもなく私たち



第34期において焦点を当てた犯罪被害者支援をはじめとする死刑を巡る様々な課題について、社会と情報を共有し、課題解決に向けて協働してゆくとが求められる。併せて、宗派や地域仏教会からの広報、また宗門校における教育や寺院での法話など、一人一人の仏教者が、仏教精神、仏教の教えをとおして地道に時間をかけて犯罪被害者支援をはじめとする課題に取り組んでいくことを提言する。

はじめに述べたように仏教の教義と死刑が相いれないことは明白である。それを踏まえた上で、いのちの尊厳と人権の見地から仏教者として様々な立場の人々に寄り添いながら、冤罪被害者など死刑制度をとりまく課題に對して持続的に取り組み、被害者も加害者も少しでも生まない社会の実現という最終的な目標を達成することを願ひ答申とする。

【第34期 国際交流審議会答申】

諮問①

「今期（第34期）では、一昨年末より新型コロナウイルス感染症が世界規模で影響を及ぼしている中、各加盟宗派のコロナ禍における海外布教活動の現状を共有し、取り組みを行う中での課題とそれに対する施策についてご審議願ひ、答申をいただきたい」

の日常生活は急変し、未だ誰もが苦しみと不安に掻き立てられています。その様な状況下で、仏教界はどのような影響を受け、何を行ったか。果たして、社会を救済する一助となれたのか。将来を見据えた方策をどの様に考えていたか。本会でもアンケート調査を行いました。社会の声に今一度耳を傾け、コロナ終息の先に見る寺院や僧侶の存在性を考えるため、株式会社寺院デザイン、薄井秀夫氏を講師に招き、「コロナ禍の先に見えてくるもの」と題して講演いただきました。

答申

コロナ禍における加盟団体並びにそれらの海外布教拠点間の連携について、そのほとんどをオンライン化へと移行でき、事業活動は継続している。また、布教活動（葬儀や法要、法話・坐禅指導など）についても、可能なものからオンライン化を実施、着々と整備・進捗され、一部では大きな発展を遂げている。一方、現状ではデジタル化に對応不可能な布教拠点や檀信徒も多く存在するため、アナログとデジタルのハイブリッドな対応が必要不可欠である。しかしながら、様々な事業や活動のデジタル化は避けて通ることが出来ず、内外を問わず各布教拠点において今後の必須事項と言える。各加盟団体は対面でも得られない宗教的体験を重視しながらも、布教拠点の事業活動についてデジタル化を推進し、信仰する人々や周辺にいる全ての人を取り残すことのない海外布教の実現に向けて支援を行っていただきたい。また、今後の海外布教の根本を見直す好機として捉え、教化のための現地人材と知識の確保・育成、環境の整備について改めて取り組まれない。

諮問②

「本会ではWFB世界仏教徒会議日本大会において採択された『2018年東京宣言』を受け、引き続きSDGsの

推進に取り組んでいる。現在、各加盟団体における取り組みの中でSDGsの17項目にあてはまる具体的な活動を共有し、SDGsの推進をしていくうえで仏教界として取り組むべき課題や施策についてご審議願ひ、答申をいただきたい」

答申

本会は仏教界がSDGs活動に取り組むにあたり、差別や貧困、環境問題など全ての17の目標について目を逸らさず、一人ひとりが自身の事柄として環境を取り巻く仕組みだけではなく、それぞれの組織や寺院において意識を変革するよう働きかけていきたい。特に仏教界においては、意思決定の場に女性が入り、活躍の機会平等を実現することに率先して取り組むことを推奨する。また、ジェンダー平等を含めた誰一人取り残さない目標のために多様性を持った制度や環境の整備は、SDGsを達成するための第一歩であると認識している。

「救援基金」寄附者一覧

【2021（令和3）年12月1日～】
 2022（令和4）年3月10日
 （時系列順・敬称略）

海眼寺
 石井 陽一郎
 郭 瑞蘭
 齊藤 清美
 朝倉 俊隆
 匿名希望1件

総計 93,000円

「賛助会員」新規入会者一覧

【2021（令和3）年12月1日～】
 2022（令和4）年3月10日
 （時系列順・敬称略）

（個人会員）
 徳永エリ（参議院議員）
 （ご入会、誠にありがとうございます）

前号の訂正およびお詫び

21ページ1段目

高野山真言宗
 総本山金剛峯寺

12行目

（誤）立場了禪

（正）立案了禪
 謹んでお詫び申し上げます。

賛助会員募集

本会では賛助会員を募集しております。全国のご寺院をはじめ、企業や団体、個人としてご入会いただけます。入会等の詳細は本会ウェブサイトをご覧ください。



無料法律相談室

寺院向け お電話1本でカンタン申込み。相談無料。

主 第二・第四木曜日

要事前予約

法律？

トラブル

墓地？

本会顧問弁護士が、寺院向け無料相談を開催しております。